

富山県植物雑記 (16) 大笠山のヒノキ林

長井幸雄

〒939-0274 射水市小島924

A preliminary survey of the *Chamaecyparis obtusa* forests in
Mt. Ohkasayama, Toyama Prefecture

Yukio Nagai

Kojima 924, Imizu-shi, Toyama 939-0274, Japan

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. は、福島県から屋久島までの本州、四国、九州に分布している。富山県内での自然分布は、南砺市の数カ所で行われている (大田ほか, 1983)。また、その群落調査は、葎島と大獅子山のヒノキ林について実施された (富山県, 1978; 環境庁, 1988)。2011年8月3日に、これまで分布が知られていなかった南砺市桂の大笠山のヒノキ林を観察する機会を得たので、その概観について報告する。併せて、県内最大級の胸高直径をもつと思われるヒノキについても報告する。

大笠山のヒノキ林は、フカバラの尾根の登山道沿いの2地点で観察することができる。標高1190m地点の登山道脇の群落は、傾斜60°の北側斜面の岩角地に成立している。10m×20mの方形区内にあるこの群落においては、高木層はヒノキ(4・4)、ブナ(1・1)、亜高木層はヒノキ(1・1)、低木層はホンシャクナゲ(1・2)、ホツツジ(+)、マルバマンサク(+)、オオバクロモジ(+)、ネジキ(+)、ヤマウルシ(+)、草本層はチシマザサ(+)から構成されている。母岩が露出した急傾斜地であることから、草本層の発達は極めて悪い。この群落内に、胸高直径0.3~2.3mのヒノキ5個体が生育している。このうち胸高直径2.3mの巨木は、樹高2.5m付近から0.3~0.7mの直径をもつ5本の幹に分岐して、樹高約25mに達している(図1)。この樹形は、雪害あるいは風害による折損を受けたため、側枝の立ち上がりまたは萌芽再生によって形成されたものと推測できる。ま

た、地際から縦1.5m、幅0.5mの口径をもつ洞が主幹にできている。この個体は、大笠山で観察されたヒノキの中で最大の胸高直径をもつ個体である。この胸高直径を超える個体は葎島や大獅子山のヒノキ林(富山県, 1978; 環境庁, 1988; 長井, 未発表)においても見いだすことができないことから、富山県下において最大級のヒノキである可能性が高い。

標高1380mの稜線部に位置する群落は、岩角地の10m×10m方形区内に、胸高直径0.5~1.5m、樹高20mに達するヒノキ5個体が生育している。この群落の高木層はヒノキ(5・4)、ゴヨウマツ(+)、低木層はチシマザサ(1・2)、ホンシャクナゲ(1・1)、リョウブ(+)、ハナヒリノキ(+)、ヤマウルシ(+)、ナナカマド(+)、ゴヨウマツ(+)、コシアブラ(+)、草本層はチゴユリ(1・2)、アカミノイヌツゲ(1・1)、アクシバ(+)、タケシマラン(+)からなっている。高木層のヒノキの被度は大きく、亜高木層を欠いている。ここでも、胸高直径1.5mに達する巨木が生育していることが注目される(図2)。

また、標高1522mの前笈ヶ岳から標高1552mのピークの間天ノ又では、緩傾斜地にブナ林がよく発達している。この林内の比較的傾斜の大きい斜面には、ヒノキの大径木が低密度で散在している林分が見られる。しかし、その面積は小さく、周囲のブナが優占する林分と群落の構成種は共通

している。前田(1950, 1951)は、ヒノキ林の群落組成を

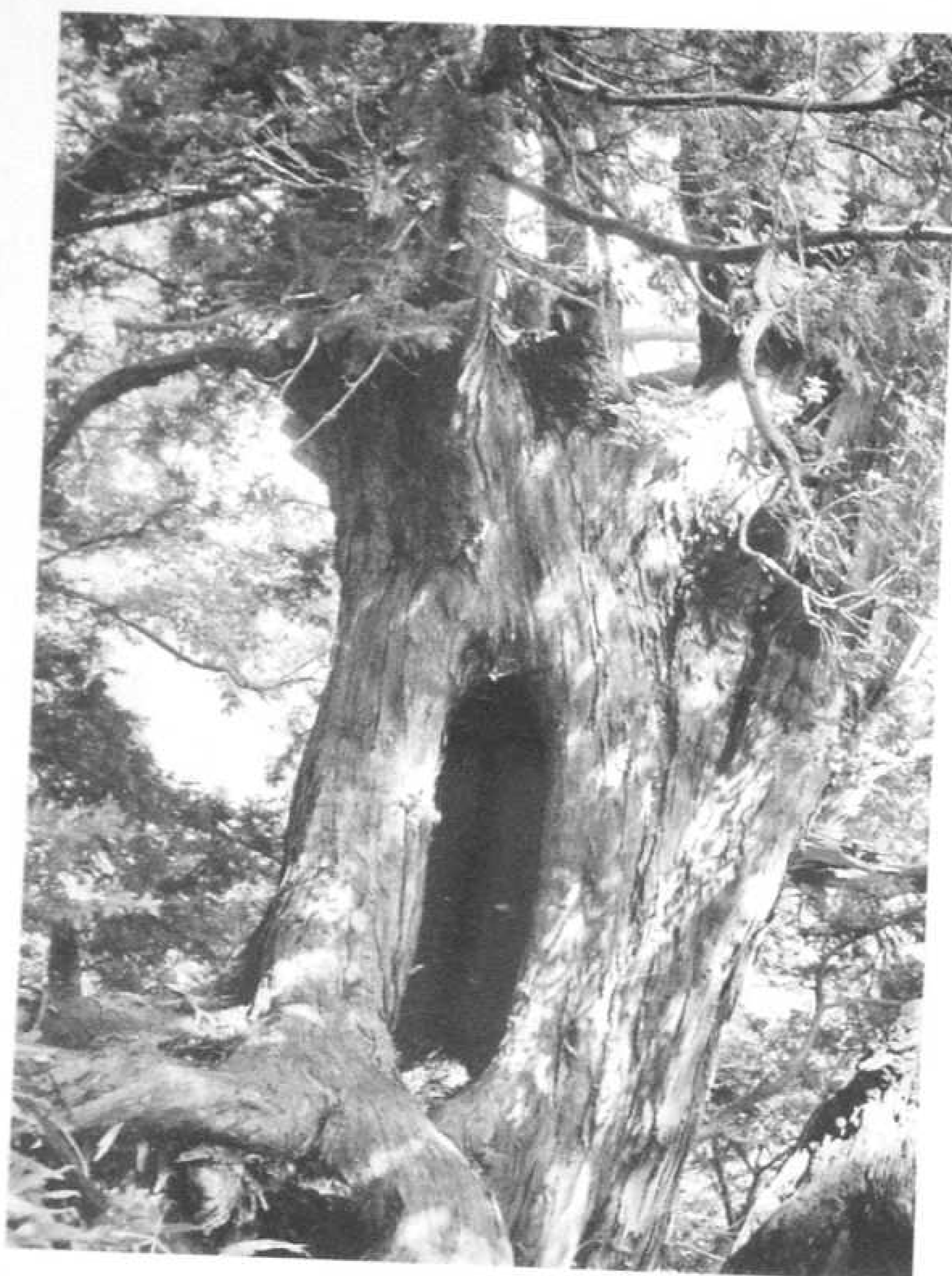


図1 標高1190m地点のヒノキの巨木



図2 標高1380m地点のヒノキの巨木

検討し、ヒノキ林を日本海要素の含む日本海型と太平洋要素を含む太平洋型に区分している。また、山中 (1957, 1979) は、ヒノキ林を尾根筋、岩角地、急斜面などで、局地的に見られる土地的極相と見なしている。大笠山のヒノキ林は、アクシバ、アカミノイヌツゲ、チシマザサなどの日本海要素を含むことから、典型的な日本海型のヒノキ林とすることができる。大笠山のみならず葎島、大獅子山のヒノキ林の成立している地域は、気候的極相としてはブナ林が成立する地域であるが、それらのいずれのヒノキ林も尾根筋や傾斜地の岩角地に成立していることから、富山のヒノキ林も土地的極相として成立しているものと考えられる。また、大笠山のヒノキの胸高直径および樹高は、葎島と大獅子山のヒノキ (富山県, 1978; 環境庁, 1988; 長井, 未発表) より大きい個体が多いこと、特に胸高直径1mを越す巨木を含むことから、大笠山のヒノキ林は葎島や大獅子山のヒノキ林より成熟した遷移の段階にあるものと判断することができる。

引用文献

- 環境庁 (編). 1988. 第3回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書追加調査・追跡調査 (富山県), 292pp. 環境庁自然保護局, 東京.
- 前田禎三. 1950. 日本海型の群落組成について. 植物学雑誌, 63: 239.
- 前田禎三. 1951. ヒノキ林の群落組成と日本海要素について. 演習林, 8: 21-44.
- 大田弘・小路登一・長井真隆. 1983. 富山県植物誌, 430pp. 廣文堂, 富山.
- 富山県 (編). 1978. 第2回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書, 326pp. 環境庁, 東京.
- 山中二男. 1957. 四国地方のヒノキ林について. 日本生態学会誌, 6: 149-152.
- 山中二男. 1979. 日本の森林植生, 219pp. 築地書館, 東京.

富山県における両生類・爬虫類の記録 (2011年)

森 大輔¹⁾・南部久男²⁾・澤田研太³⁾・福田 保⁴⁾・後藤優介⁵⁾・荒木克昌⁶⁾・小林周一⁶⁾・加藤智樹⁶⁾

- ¹⁾富山市ファミリーパーク 〒930-0151 富山市古沢254
- ²⁾富山市科学博物館 〒939-8084 富山市西中野町1-8-31
- ³⁾富山県ナチュラリスト協会
- ⁴⁾富山東高等学校 〒931-8502 富山市下飯野荒田6-1
- ⁵⁾立山カルデラ砂防博物館 〒930-1405 中新川郡立山町芦峯寺字ブナ坂68
- ⁶⁾ワイルドアイズ 〒930-0324 中新川郡上市町新町52

Records of Amphibians and Reptiles in Toyama Prefecture, 2011

Daisuke Mori¹⁾, Hisao Nambu²⁾, Kenta Sawada³⁾, Tamotsu Fukuda⁴⁾, Yusuke Goto⁵⁾, Katsumasa Araki⁶⁾, Shuichi Kobayashi⁶⁾ and Tomoki Kato⁶⁾

- ¹⁾Toyama Municipal Family Park Zoo, Furusawa 254, Toyama-shi, Toyama 930-0151, Japan
- ²⁾Toyama Science Museum, Nishinakano-machi 1-8-31, Toyama-shi, Toyama 939-8084, Japan
- ³⁾Toyama Prefectural Naturalist Association
- ⁴⁾Toyama higashi Senior High School, Shimoiinoarata 6-1, Toyama-shi, Toyama 931-8502, Japan
- ⁵⁾Tateyama Caldera Sabo Museum, Ashikuraji Bunazaka 68, Tateyama-machi, Toyama 930-1405, Japan
- ⁶⁾Wild Eyes, Shinmachi 52, Kamiichi-machi, Toyama, 930-0324, Japan

はじめに

富山県内の両生類・爬虫類相を把握する目的で、筆者らは2006年からの目撃記録等を報告した (森ほか, 2009, 2010, 2011)。今回、2011年の目撃記録等を報告する。

方法

データの整理方法については、森ほか (2009) に準じた。

結果及び考察

今回、2011年の両生類・爬虫類のデータが計93収集された。

1. 両生類

両生類は、17種76件の情報を収集することができた (表1)。

レッドデータ (環境庁自然保護局野生生物課,

2000; 富山県, 2002) に記載されている絶滅の恐れのある種はナガレタゴガエル (富山県: 危急種)、アカハライモリ (富山県: 希少種)、ヤマサンショウウオ (ハクバサンショウウオ) (富山県情報不足, 環境省絶滅危惧 I B類) の3種であった。

ナガレタゴガエルは11月に富山市と黒部市の溪流や水溜りで成体が確認された。いずれも既知産地である (南部ほか, 1996, 1997)。今回の確認した個体は、繁殖地へ向かう個体と考えられる。本種は富山県内での産卵場所や産卵時期は不明であり、継続的な調査が必要である。

ヤマサンショウウオ (ハクバサンショウウオ) は、本県では山地に生息し、生息地の報告は少ない。今回は、既知産地の大辻山や有峰 (Nambu, 1991) の山塊で発見された。いずれも確認卵数は少なく小規模の産卵場所である。

その他、トノサマガエルは、平野部では激減し